

「裏日本」の歴史は日本の20世紀史の本質

「表日本」なしに「裏日本」を概念することはできないし、逆に「裏日本」なしに「表日本」はあり得ませんでした。「表」「裏」一体の概念であって、「表」の発展のために「裏」が欠かせなかったという事情は、「裏日本」が日本の近代化の問題性をあらわす存在であることを示しているのです。「裏日本」という言葉にこめられた実態や意識は今日も無くなっていません。

「裏日本」という言葉が1900年頃から社会的格差を表現する言葉として登場したということは、「裏日本」という言葉は20世紀を象徴する言葉であり、その歴史は日本の20世紀史の本質的な側面を示すものといえましょう。

求められる「表」「裏」一体の近代化

「裏」を踏み台とした「表」中心の経済効率性の論理は、いま問い直されようとしています。「裏」が「表」化を目指すのではなく、「表」のあり方自身を問う動きが現実にあられています。生産力至上主義の時代を超えようとするいま、さらにはアジアのなかの日本という位置づけが深まるいま、日本の近代化を、「裏」と「表」を一体としてとらえることが、「裏」の人にも「表」の人にも求められていると思いま



す。このことを抜きにした、東京による「新潟の民度の低さ」批判は、「五十歩百歩」だと思います。

巻町の「裏日本」を超える試み

巻町民のなかには原発に頼らない町づくりの方向性がみえつつあったことが、原発を拒否する投票結果を生んだのではないのでしょうか。原発反対グループから出された主張には、「原発を作るなら電気を使う東京に作れ」というような「裏日本イデオロギー」的なものがまったく見られませんでした。住民投票後、「巻ビジョン研究会」というネットワーク組織が誕生し、巻町のビジョンづくりにとりくんできました。

今後は地域の自律性重視・地方自治権強化・多様性・生活と文化重視・低成長などの方向性が目指されるべきだと思います。



「表」の発展のために「裏」が欠かせなかったという事情は、「裏日本」が日本の近代化の問題性をあらわす存在であることを示しているのです。

今後は地域の自律性重視・地方自治権強化・多様性・生活と文化重視・低成長などの方向性が目指されるべきだと思います。

裏日本
-近代日本を問いなおす-
著者：古厩 忠夫
発行：岩波新書
700円（税抜）



インタビューを終えて



「中学時代の先生の言葉が鮮明に蘇ってきた。」

古厩教授のインタビューは、松風会館の会議室で行われた。外の陽ざしはもう夏を思わせるくらい強烈であったが、エアコンの効いた室内ではうとうとしなくなるような昼下がりであった。

そんななか、古厩教授の話をつきながら窓の外に目をやり、ぼんやりと中学時代を思い出していた。その社会科の先生は思想的には左翼系でラジカルな部分も持っていたように記憶しているが、人間的にはきわめて常識的で物静かな印象であった。前後の状況は思い出せないが、あるとき憤り

を抑えきれずに「自らが裏日本というのはやめようじゃないか」と語気を荒げて言い放った。それまで意識せずに使っていたが、「そうか、裏日本というのは差別用語だったのか」とはじめて気づいた。それから数年を経ずして、マスコミから「裏日本」の文字はほとんど消滅した。70年代半ばのことだったと思う。

今回も142号につづいて撮影班ということで気楽に後からついていけばいいと高をくくっていたので、突然インタビュー後記を執筆するはめになって、その準備不足を反省している。しかし勝手ながら、それぞれの先生のもってられる雰囲気や人間性を写真を通して多少とも感じ取っていただければ、お役目は果たせたと思っている。

（歯学部 川瀬知之之）